

# 妙法尼御前御返事

弘安三年七月一四日 五九歳

御消息に云はく、めうほうれんぐゑきやうをよるひるとなへまいらせ、すでにちかくなりて二声かうしゃうとなへ乃至いきて候ひし時よりもなをいろもしろく、かたちもそむせずと云云。

法華經に云はく「如是相乃至本末究竟等」云云。大論に云はく「臨終の時色黒きは地獄に墮つ」等云云。守護經に云はく「地獄に墮つるに十五の相、餓鬼に八種の相、畜生に五種の相」等云云。天台大師の摩訶止觀に云はく「身の黒色は地獄の陰を譬ふ」等云云。

夫以みれば日蓮幼少の時より仏法を学し候ひしが、念願すらく、人の寿命は無常なり。出づる気は入る気を待つ事なし。風の前の露、尚譬へにあらず。かしこきも、はかなきも、老いたるも若きも、定め無き習ひなり。されば先づ臨終の事を習ふて後に他事を習ふべしと思ひて、一代聖教の論師・人師の書積あらあらかんがへあつめて此を明鏡として、一切の諸人の死する時と並びに臨終の後とに引き向けてみ候へば、すこしもくもりなし。此の人は地獄に墮ちぬ乃至人天とはみへて候を、世間の人々或は師匠・父母等の臨終の相をかくして西方浄土往生とのみ申し候。悲しいかな、師匠は悪道に墮ちて多くの苦しのびがたければ、弟子はとゞまりて師の臨終をさんだんし、地獄の苦を増長せしむる。譬へばつみふかき者を口をふさいできうもんし、はれ物の口をあけずしてやまするがごとし。

しかるに今の御消息に云はく、いきて候ひし時よりも、なをいろもしろく、かたちもそむせずと云云。天台云はく「白々は天に譬ふ」と。大論に云はく「赤白端正なる者は天上を得る」云云。天台大師御臨終の記に云はく「色白し」と。玄奘三蔵御臨終を記して云はく「色白し」と。一代聖教の定むる名目に云はく「黒業は六道にとゞまり、白業は四聖となる」と。此等の文証と現証をもつてかんがへて候に、此の人は天に生ぜるか。はた又法華經の名号を臨終に二反となうと云云。法華經の第七の巻に云はく「我滅度の後に於て應に此の經を受持すべし。是の人仏道に於て決定して疑ひあること無けん」云云。

一代の聖教いづれもいづれも、をろかなる事は候はず。皆我等が親父、大聖教主釈尊の金言なり。皆眞実なり。皆実語なり。其の中にをいて又小乗・大乘、顯教・密教、権

大乘・実大乘あいわかれて候。仏説と申すは二天・三仙・外道・道士の経々にたいし候へば、此等は妄語、<sup>もうご</sup>仏説は実語にて候。此の実語の中に妄語あり、実語あり、<sup>きご あつく</sup>綺語も悪口もあり。其の中に法華経は実語の中の実語なり。真実の中の真実なり。真言宗と華嚴宗と三論と法相と俱舎・成実と律宗と念仏宗と禅宗等は実語の中の妄語より立て出だせる宗々なり。法華宗は此等の宗々には<sup>これら</sup>に<sup>似</sup>るべくもなき実語なり。法華経の実語なるのみならず、一代妄語の経々すら法華経の大海に入りぬれば、法華経の御力にせめられて実語となり候。いわうや法華経の題目をや。<sup>おしろい</sup>白粉の力は<sup>うるし</sup>漆を変じて雪のごとく白くす。<sup>しゅみせん</sup>須弥山に近づく衆色は皆金色なり。法華経の名号を持つ人は、<sup>ないし か こおんのんごう</sup>一生乃至過去遠々劫の黒業の漆変じて白業の大善となる。いわうや無始の善根皆変じて金色となり候なり。

しかれば故聖霊、最後臨終に南無妙法蓮華経と<sup>唱</sup>となへさせ給ひしかば、一生乃至無始の悪業変じて仏の種となり給ふ。<sup>ぼんのうそくぼだい</sup>煩惱即菩提、<sup>しょうじそくねはん</sup>生死即涅槃、即身成仏と申す法門なり。かゝる人の縁の夫妻にならせ給へば、又女人成仏も疑ひなかるべし。若し此の事<sup>そらごと</sup>虚事ならば釈迦・多宝・十方分身の諸仏は妄語の人、大妄語の人、悪人なり。一切衆生をたばらかして地獄におとす人なるべし。<sup>だいばだつた</sup>提婆達多は<sup>あびだい</sup>寂光浄土の主となり、教主釈尊は阿鼻大<sup>じょう</sup>城<sup>炎</sup>のほのをにむせび給ふべし。日月は地に落ち、大地はくつがへり、河は逆しまに流れ、須弥山はくだけをつべし。日蓮が妄語にはあらず、十方三世の諸仏の妄語なり。いかでか其の義候べきとこそ<sup>覺</sup>を<sup>くわ</sup>ば<sup>げんざん</sup>へ候へ。委しくは見参の時申すべく候。

七月十四日

日 蓮 花 押

妙法尼御前申させ給へ